続 二 子 山 城 物 語

武 島 種 一

二子山（神石郡神石町永野）

山城志第2巻5号に二子山城についてかいてみましたが、その後関連のあることについて、調べて見ますと、最も重要であるのに不明なことは備中府志その他に「和田合戦後備中猿滝城に蟄居しその後備後国長野村二子山城主となる」とある横山右馬充時兼と父権頭時広が菩提寺法光寺の過去帳にのっていないことです。

前回でも述べました萩藩における横山氏は500石も知行を食んでいることでもあり更に横山道租法師丸は関東の住人にして後醍醐天皇南都行幸の後正平16年（1351）宮方に参じて同年9月14日常陸親王より令旨を下し置かれると伝えられ現に所持していることからして横山系の嫡流と思われ、当時はかなり勢力を有した武士であったことが窺われ、二子山城主の横山氏と同一家系である確率は高いと考えられます。

大内氏の家臣にも横山氏はいても、これは、岩国横山の地名をとって横山を称した氏で萩藩の横山氏とは違うようです。

ここらの解明が今後の課題として残りました。

二子山城については直接合戦についての記録は前回で述べました八ツ塚合戦以外が見つかりませんので、神石町内で横山の系統を伝える系図がありますので転載しこれを中心にして横山氏一統の流れと動静を考察して見たいと思います。（後掲）

この系図は「七党系図」「小野姓横山党略系図」から見て時兼以前の系に誤謬が多いのではないかと思われます。

ただ小野氏は一般的には敏達天皇の子孫とされていますが正しくは孝昭天皇の皇子天押帯彦押人命の子孫で近江国滋賀県小野村に住んでいたので小野を氏としたのですが、春日氏の支族であったことから最初は春日小野氏といっていたようです。

まず和田合戦（1213）後時兼が居城した備中猿滝城祉を見ますと（現岡山県阿哲郡哲多町）三方とも険阻で登るすべくもなく、一方僅かに小経をもって通じています。前方は一面に老松古杉が鬱蒼として茂り背面一帯は断崖絶壁で風景は頗る絶佳です。

合戦に際しては食糧と水の問題を除けば難攻不落の要害と思われます。

この城についての古記口碑その他に

①正治2年（1200）梶原景時が誅せられて和田義盛がこれに代ると其の臣横山右馬亮が猿滝

城主となってこの本郷（現哲多町役場所在地一帯）を治めたが長くは続かなかった。この右馬亮は和田合戦が建保元年（1213）ですから二子山城主となった時兼と同一人と思われる。

②細川の勢力も応仁の乱頃まで続いたが正長元年（1428）上房郡井山城主細川民部小輔持久の配下横山右馬亮兼家を則安猿滝山に出城させてこの地に勢力を振った。

（①と②の横山右馬亮は同系であるかどうか、200年の差があるのではっきりしません。）

③合戦に際して水米を絶って落城させた。

④城谷には五輪塔が多く群をなして積んであり戦死者の墓と思われる。他に宝篋印塔あり。

⑤馬洗の池あり将兵の馬を洗った所という。

⑥びくに屋敷跡ありかつて女房達の住居と伝えられる。

⑦城主が敗退に望んで財宝を埋没して去ったと伝えられる所あり。

これらは二子山城主につながる横山氏との関連があるのか正長元年に入城した横山氏に関するものか不明です。

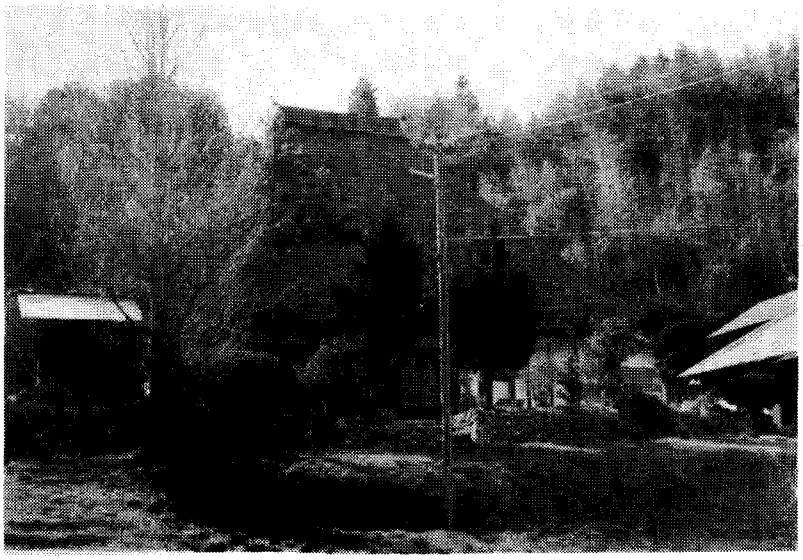
この系図では、重忠を初代としてその子重望が築城在城したことになっていますが、これは他の資料記録と異っています。が如何なものかと思います。

城主の墓を調べて見ますと、重忠を初代とし五代忠義（八ツ塚合戦で討死）と未亡人の墓以外はそれらしいものが見当りません。

ただ楢原（ならはら）山城（神石町草木）に移った九代義国、十代義隆の墓と称されているものはありますが城主の墓としては、あまりにもみすぼらしいという思いがします。

重望の弟資忠は江草村（現神石町）に住して江草氏を名乗るとありますが、この資忠の子元忠（江草和泉守）は備後宮内桜山茲俊の命を受け元弘元年9月9日北条高時討伐の軍を起し山野村（現福山市）戸屋ケ丸山城主大原経信（宇田源氏佐々木氏族）を攻落し同城に在城していたようですが後北条軍に攻められ落城し服部村（現福山市）椋山城に入城し防ぐも支え難く桜山本城に退き、子息元治、忠氏等は、服部高山の山中へ逃げこんだようですが、更に一部の者は神石郡坂瀬川（現三和町）辺へ逃げこんだようで現に江草を名乗っている旧家があります。

資忠より十二代元房は天文20年四川滝山城にて討死十三代元義は四川滝山城より備中国吉城へ逃げています。十四代元政は山野村庄屋で、水野勝成の猟友であったと伝えられています。



横山家菩提寺「法光寺」（神石郡神石町永野）

二代横山重望は二子山城下の地名永野を名乗っていますが、末裔の元広島県知事永野巌雄氏は知事在職中再三菩提寺法光寺へ墓参されました。又同氏の尊父永野護氏（元運輸大臣）は二子山城跡一帯の購入を計画されましたが、実現しなかったようです。

七代俊綱の弟俊親は帝釈峡犬潮（神石町）にあります矢不立（やたたず）城主庄

野家（大職冠鎌足の後裔）へ養子に行き次郎と名乗り天文20年奴可郡久代三河（宮氏）に属し同郡国広城（現比婆郡東城町帝釈）田辺美作守を攻め敗れとあります。これが有名な「末渡合戦」です。後沼隈郡山手村に移れりとあります。

十代義隆は父九代義国をつれて草木村（現神石町内）楢原山城に移っていますが理由は二子山は要害なれど水なき為と書いてあります。

それが理由の総べてではないでしょうか。

たしかに二子山城周辺は水が少く現今でも年によっては水田の田植に困ることがあります。一方楢原山城下は福桝川が流れ水量は豊富です。

この義隆の長子隆国は、天文3年（1534）大内旗下の士となって福山市津之郷小森城（館）に移り山手銀山城主杉原盛重に任え中世末期における備南の有力武士の1人でありました。

長子が津之郷へ移ったことは内輪の事情もあったでしょうが毛利氏の影響ではないかと思われます。杉原氏滅亡後は毛利氏より所領を安堵され、関ヶ原合戦後毛利氏の防長移転に従わず、帰農し、後元和5年（1619）水野勝成が備後に入府するに及んで長子五郎右ヱ門庄屋となり舎弟惣右ヱ門は200石を賜り家人に召出されています。このことは同族江草氏ともに水野勝成と関係が生じていることは不思議な因縁と思います。　横山家はその後代々庄屋として小森城（館）跡に住みつづけてきたのですが、山陽新幹線工事のためこの館はなんの痕跡も残さず消えさっていることは、時代の流れとはいえ残念なことです。

ただ小森城主の氏寺月光寺の系図では初代城主は義隆の長子隆国ではなく弟の資員となっているそうです。

楢原山城主としての横山家は義隆で終り、その後は完全に毛利氏の支配下に入ったようです。その後二代神石郡司をつとめておりますが、この系図以外で同じ流れといわれている高光村（現神石町）住の横山家からも1人つとめているようです。

前回述べました天文22年毛利元就が西城町の宮氏を攻めたとき義隆は宮氏の応援にいったと神石郡誌にあるのはなにかの誤りで久代記によりますと天文5年義隆ではなく一族と思われる横山長門守が応援に行き相手は毛利ではなくて尼子氏で戦功があったようです。

以上二子山城について述べましたが時兼から義隆まで実質十二代と思われる約300年余戦国乱世を切りぬけたことは神石地方山城の主としては稀なことで別段善政をしいたためとは思われませんし、善政をしくことが生存に役立つ時代ではなかったでしょうから尼子と毛利さらには身近な宮氏などの間をうまく立ち廻わっていたと思われます。

その1つのあらわれとして、河内守義隆の男横山市郎右ヱ門尉の次男清兵衛尉は宮上総介高盛が西城大富山城に移った後の久代河内城の城代をつとめた高尾新介の養子となっています。こうしたことは他にもあるでしょう。

最後に往時二子山所在地、旧永渡村時代小学校の運動会歌に「二子の山の動きなく」と高らかに唱われたことを思い出しながら終ります。

参考文献

(1)神石郡誌　(2)西備名区　(3)本郷村誌
(4)備中府志　(5)久代記　(6)家系系図入門
(7)萩藩諸家系譜　(8)群書系図部集
(9)山陽新幹線地内遺跡発掘調査報告書
(10)福山市古文書調査記録集
(11)備後古城記

神石郡文化財保護委員長
（神石郡神石町相渡）

横山氏系図

（広島県神石郡神石町草木　小野義忠氏蔵）

- 経兼
  - 横山由来
  - 武州ノ在名横山ヲ名乗ル
  - 右両所ヲ源将八幡太郎義家公ヨリ賜ハル依テ
  - 為軍功賞禄武蔵国横山郷相模国下足柄郡
  - 奥州合戦并出羽国金沢城責ニ振武勇故
  - 童名隠岐鬼若丸後横山野大夫ト云康平年中
  - 経義 ― 維範
    - 兵衛尉
    - 大学頭是ハ隠岐判官維茂カ祖也
  - 恒季 ― 恒義 ― 義兼
    - 弾正
    - 二代弾正
    - 治部少輔
  - 葛紘
    - 小野
      - 道風
      - 従四位下
      - 好古
      - 参議従三位
    - 良真
    - 参議
  - 篁 ― 守秀 ― 恒守
    - 隠岐小太郎
    - 修理亮
  - 毛人
    - 毛野
    - 胤守 ― 岑守
      - 従四位下
      - 参議従四位下
  - 敏達天皇 ― 春日王子 ― 妹子臣
- 重忠
  - 初代
  - 栄興院殿霜峰義剣大居士
  - 寛元四年（一二四六）三月一日没
  - 備後国神石郡下着永野村ニ在城
  - 横山判官城州於北嵯峨屢交民間蟄居也永由緒
- 勝時 ― 知時
  - 横山三郎
  - 和田合戦ニテ討死
  - 横山五郎
  - （一二一三）
  - ※和田合戦は建暦三年
  - 度の高名有之
  - 相州浅井ニ在城也数十
  - 室ハ和田四郎義胤カ娘
  - 横山太郎後右馬允ト云
  - 経テ上洛ト云
  - 故安房国ニ落行程
  - 田合戦ニ味方敗軍
  - 父子ハ建保六年和
  - 横山重郎ト云重兼
- 時兼 ― 重兼
- 経時
  - 横山中務丞
  - 女子
  - 梶原景時室友景母
  - 女子
  - 和田義盛室
  - 時広
    - 顕広
      - 賢門討死
      - 白河合戦高名待
      - 横山悪五郎
    - 待賢門夜軍ニ高名
    - 平治乱白河合戦并
    - 横山小権守悪次郎

光源院殿別翁玄峯大居士
文永十一年四月九日没
永野越後守

3代 重治

女

利治

霊光院殿没山玄量大居子
建武五年七月十日没
永野周防守

4代 義治

江草次郎兵ヱ尉

道安

永野忠義室
女

江草伊賀守
元治

江草五郎左ヱ門

元忠

三坂倫忠室
女

忠氏

宮左ヱ門佐則氏室
女

江草左京亮
忠安

江草ヲ名乗ル江草始祖
勘解田左ヱ門江草村住

資忠

真珠院殿俊山大綱大居士
康元元年（一二五六）八月二日没
ヲ名乗ル永野名字ノ元祖也
一所ニ在城也故在名永野
ニ築要害ヲ而老父重忠ト
永野弥中太永野村二子山

2代 重望

三坂村ニ住ス故在名ヲ名乗ル
三坂狩野介

室江草資忠娘
三坂権弥

三坂右近先祖也
三坂四郎太郎

倫忠

倫景

ノ祖父也故ニ養子ニス
庄野民部ト云ハ俊親カ母方
庄野次郎ト云矢不立城主

元親

元義

俊親

泰親

庄野修理

女

真源院殿大心了賞大居士
応永二年二月十日没
永野和泉守

7代 俊綱

寒松院殿義翁宗俊大居士
後ル至徳二年五月二十三日没
永野左近大夫忠義カ妾ノ子也七才ニテ父ニ

6代 義俊

宝光寺殿宇林宙大禅定尼
室貞治二年三月二十九日没
江照院殿天真亮空大居士
延文三年五月十二日没
ヲ大半討取忠義モ終ニ討死ス
ス城中雖為小勢皆射手ニ而寄手敗北ス八塚迄追敵軍
備中国野辺城主天竺上野介以大勢此二子城ニ押寄
法名ヲ宇林孔宙尼ト称ス宝光寺ノ開山也
永野兵部太夫室江草元忠娘室ニ無実子

5代 忠義

- 女　江草次郎兵エ室
  - 華室浄連居士
  - 寛永十八年七月十一日没
  - 谷ニ而岩石落シテ乗得タリ
  - 働有并馬上ノ名誉永野村岩屋
  - 因茲弓組足軽三十人預り朝鮮陣
  - 毛利輝元公ノ家臣也是ハ射手也
  - 横山甚之丞
- 義政
  - 瑞泉院殿刃庵宗剣大居士
  - 天文十五年七月一日没
  - 称シ真言宗也
  - 名乗ル宝泉寺開祖瑞泉院ト
  - 移此時ヨリ先祖ノ名字横山ヲ
  - 楢原山ニ築要害老父義国誘引而
  - 失勝利事数度慮ミ而草木村
  - 居城永野村二子山要害無水而
  - 横山河内守備後大男ト云
  - 義隆
    - 瑞竜院歓翁了善居士
    - 永禄十二年九月一日没
    - 高名終ニハ討死スル也
    - 多カ陣下ニ走入雖為
    - 中国高松陣ニ而宇喜
    - 毛利輝元公属幕下備
    - 横山源三左エ門尉
    - 知隆
      - 得性院横庵是山居士
      - 宝泉寺再開基
      - 万治二年七月二十七日没
      - 草木村住神石郡々司ヲ勤ム
      - 横山平右エ門尉
  - 義次
  - 女
  - 女
  - 女
- 8代　国綱
  - 本覚院竜峯治水大居士
  - 嘉吉元年正月十八日没
  - 永野監物
  - 9代　義国
    - 信解院殿高外義山大居士
    - 九月二十五日没
    - 永野長門守延徳元年
    - 10代　義隆